

ロスト *Lost World* ワールド

林真理子



ロスト
Lost World
ワールド
林真理子

読殻新聞社

ロストワールド

1999年（平成11年）4月16日 第1刷

著者 はやし まり こ 林 真理子
装丁者 しばかわいくよし 渋川育由

編集者 田口武雄

発行人 黒埼精三

発行所 読売新聞社

〒100-8055 東京都千代田区大手町 1-7-1

〒530-8551 大阪市北区野崎町 5-9

〒802-8571 北九州市小倉北区明和町 1-11

〒460-8470 名古屋市中区栄 1-17-6

印刷/凸版印刷株式会社

製本/大口製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取り換えいたします。

Printed in Japan

● 目次

第一話

聖夜

7

第二話

形見

35

第三話

制作発表会

63

第四話

回想その1 一九八六年

84

第五話

朝焼け

106

第六話

回想その2 一九九〇年

139

第七話

うわさ

174

第八話

古都

202

第九話

東京

225

第十話

回想その3 一九九〇年

249

第十一話

打ち上げパーティー

283

第十二話

最終回

320

第十三話

緑風

369

ロストワールド

第一話 聖夜

どこかにひっかけたからと言って、日花里が白い絹編みのセーターを差し出した。
「明日これ着ていきたいから、絶対に直しといてね」

右肘の上のあたり、毛糸がひっ張られて穴がのぞいている。目を凝らさなくてはわからない大きさであるが、日花里は我慢出来ないらしい。十歳の娘の、洋服に対する執着や几帳面さに沢野瑞枝は時々うんざりすることがある。ソックスも汚れたからといって、朝、昼、晩と三回穿き替えることがあった。

友人に言わせると、これは幼い頃ベビーシッターに育てられ、自分を構ってくれなかった母親に対する代償行為ということだ。手をかけさせることで母親の自分への愛情を確かめようとしているという。

が、瑞枝には別の見方があった。娘のこの洋服へのこだわりは、まさに父親譲りなのだ。別れた夫もまた自己愛の裏返しのような衣装道楽であった。多分あと二、三年もすれば娘の要求はさらに強く、こと細かくなっていくはずだ。

その日のことを考えて、瑞枝はやれやれと苦く笑う。杞憂きゆうというよりは、娘の成長を楽しむに思う気持ちからだ。

このままうまくいけば、日花里はかなり美しい娘になるはずであった。物書きの女独得の醒めた目で、瑞枝は時々日花里の顔を点検する。睫毛まつげの長い大きな目は自分がそっくり与えたものだが、笑うとめくれ

て見える厚ぼったい唇は父親のものであろう。昔だったら悩みの種になったかもしれない唇であるが、今の時代は個性的とか愛らしいとか言われるはずだ。

そうした娘のために、セーターを繕ってやったり、ソックスをまめに洗うことぐらいどんなことがあるうか。

瑞枝が裁縫箱を取りに行こうと立ち上がりかけた時だ。居間のファクシミリがリリと受信の音をたてた。四年前、連続ドラマの仕事が入った時にふんばつて入れた営業用ファクシミリは、紙を吐き出すスピードも大層早い。

瑞枝はまず一枚目を取り上げた。発信元は品川シナリオスクールとある。

「四月からの講師をお引き受けいただきまして、ありがとうございます。講師紹介のプロフィールをお送りいたします。訂正がありましたら十二月二十四日までにご連絡ください」

二枚目の紙片を、瑞枝は全く他人ごととして読む。

「沢野瑞枝 本名も同じ。横浜生まれ。立教大学文学部史学科卒業。出版社勤務、フリーライターを経て当校に学ぶ。一九九二年シナリオコンクール入選作の『キラキラ星たち』でデビュー。現代を描く女流脚本家としてヒット作多数」

自分のプロフィールには幾つかの誤りがあると瑞枝は思った。誤りというよりも虚偽といった方がいいかもしれない。

出版社勤務とあるが、瑞枝は一度もそんなところへ所属したことはなかった。瑞枝が学校を出た年も出版社は大変な競争率で、大手はもちろん中堅どころと呼ばれるところまですべて瑞枝は落ちてしまった。

幸いなことに大学の先輩が女性雑誌に勤めていて、データーを取ったり、読者の応募ハガキを整理したり、

といったような半端仕事をくれた。それがやがて原稿を書くフリーライターへと発展していくのであるが、脚本家としてデビューする際、出版社勤務の方が聞こえがいいということで誰かに入れ知恵された。いちいち確かめる人もいないということがあり、そのまま使っている。

もつとひどいのは「ヒット作多数」というところかもしれない。

ちょうど女性脚本家がブームになり始めた頃であつたから、三十二歳でデビューしてからはほとんど拍子でことが運んだ。次の年にはゴールデンタイムではなかったものの、連続ドラマの仕事をもらえたくらいである。二人のOLを主人公にしたそのドラマは、平均視聴率が一七パーセントというまずまずの数字を上げ、瑞枝は「テレビ界の新世代」などと言われたものだ。テレビ雑誌から取材を受けたり、三つの局のプロデューサーから打診があつたりしたのもこの頃である。

「大ヒットはむずかしいものの、そこそこの数字はとれる脚本家」

という定評が出来かかつたのであるが、次のドラマは大失態を演じた。視聴率がひとケタすれすれのところまでいつたのである。この時は現場のスタジオの雰囲気も最悪で、まだこの世界に入つて日の浅い瑞枝には耐えられないことばかり続いた。プロデューサーから脚本を何回も何回も書き直すように言われ、真夜中にしょっちゅう呼びつけられたものだ。

「瑞枝ちゃんのおかげで、こんなに苦労して痩せちゃつたよ。慰めてくれても悪くないんじゃないの」
あからさまに肉體関係を要求されたこともある。

口惜し涙をさんざん流した後、次に手に入れたスペシャルドラマ枠で、今度は二〇パーセントという高視聴率が出た。が、一度きりのドラマだから人の記憶にはほとんど残っていないはずだ。

六年間で単独のものを含め、五十本ほどのドラマを書いてきたが、三勝七敗といったところであらうか。

とても“ヒット作多数”といわれる脚本家ではないのだ。

“ヒット作多数”の脚本家だったら、どうしてシナリオスクールの講師などするだろうか。この半年というものの、どこのテレビ局からも連絡がないのだ。

数年先のスケジュールまで決まっている大物は別として、瑞枝クラスの脚本家だったら、ひたすらプロデューサーからの電話を待つしかない。この半年、二回ほど彼らと食事をしたけれども、どれも仕事と結びつくものではなかった。注文が来ない脚本家というのははじめなものだ。二年前中規模のヒットが出たドラマをノベライズした時の印税が少し残っている。次の仕事が入るまで、その貯金で喰いつなごうと思っていたのであるが、どう考えても無理なことがわかった。

昔からつき合いのある編集者に頼み込んで、タレント本のゴーストライターやリライトをしたが、それもしょっちゅうある仕事ではない。仲間うちで飲んでる時に愚痴をこぼしたら、ひとりが講師の席を譲ってもいいと言いつ出した。来年からNHKの朝の連続ドラマを書くので、とてもそんな余裕が無くなったそう。

業界うちでシナリオセンターの講師というのは、ツイていない脚本家が意志的に引くトランプのババのように言われている。ツキがめぐってこないうちは、とにかくこれを手におとなしくしているしかない。少なくとも何とか食べていくことは出来る。

そしてやがてチャンスがめぐってきたら、大急ぎで掌のカードを誰かに引かせるようにすればよいのだ。瑞枝は自分のプロフィールが書かれたファクシミリ用紙を見つめる。おそらくテレビ局か雑誌社の資料を見てつくったものであろう。ということは沢野瑞枝という脚本家のファイルは、そこかしこに出まわっていることになる。けれども今度も自分は選ばれないのであろうか。プロデューサーの頭から、自分のフ

アイルは完全に消されてしまうのであろうか。

瑞枝はファックス機の上に貼ったカレンダーを見上げる。12という数字と北欧の雪景色を撮った写真がいかに寒そうであった。四月の番組改編時に向けてそろそろテレビ局が動き出す頃である。バラエティやニュースが増えない限り、一週間に二十四か二十五のドラマがつくられるはずだ。そのうちNHKの大河小説や時代劇といった絶対に声がかかるはずもないものを除けば、瑞枝のチャンスは十八といったところであらうか。十八人の中にさえ入れば、瑞枝は半年間脚本家として生きることが出来るはずである。

瑞枝はあと十日間待ってみようかと考える。ちょうどクリスマスイヴの日である。幸運が起こってもいい頃であった。

「ねえ、お母さん、クリスマスに何を買ってくれるの」

「そうねえ、コートかセーターっていったところじゃないの」

「そんな、コートとかセーターなんてさ、買ってくれてあたり前のものじゃない。そんなのよりさ、ワンピース買ってよ。うんと可愛いバッグとお揃いのやつ」

こんな時、日花里は唇をとがらせる。誰に教えてもらわなくとも、ものをねだる時は生意気にしかも可愛らしくすることだとよく知っているのだ。そんな時、日花里の少女の殻はするりとむけて、中から不意に生々しいものが顔をのぞかせる。

「亜美ちゃんみたいなのが欲しいよ。亜美ちゃんはセンスいいよ」

日花里は近くの公立小学校に通っているのであるが、同級生の中に私立を落ちてこちらに入学してきた派手なグループがあるらしい。

「亜美ちゃんね、ヒロミチ ナカノ キュート着てるんだよ。ラルフ ローレン ガールズとかさ、バーバリーも買ってもらうんだよ。すっごく可愛いよ」

「亜美ちゃんのうちはお金持ちなんですよ。だからブランド品もいっぱい買って貰えるのよ」

瑞枝はうんざりとして娘をたしなめながら、十歳の少女が着るものもやはりブランド品というのかと奇妙な気持ちになる。

「あのね、うちは今、ちょっと景気悪いの。お母さん、仕事したくてうずうずしてるんだけどさ、なかなかうまくいかないのよ。だからさ、何もしないっていうことはないけどもね、今年のクリスマスにすごい期待をされると困っちゃうわ」

母子家庭独得のあけすけな物言いは、最近成功することばかりとはいえない。娘の顔がたちまち曇っていくのがわかった。

「ねえ、お母さん、うちはそんなに貧乏なの。クリスマスに、本当はものを買って貰ったりしたらいいんじゃないの」

「そんなことないったら」

瑞枝はわざとのけぞるようにして笑った。

「ほら、昨年さ、お母さんが書いた水曜日の『今夜は帰らない』憶えているでしょう」

「あのドラマ、あんまり見ちゃいけないって言ってた」

「そうだったかしら。ま、いいや。あのね、あのドラマ、すっごくたくさんの人が見ていたの。そしてね、あのドラマをお母さん、小説にしたの。そしたらとっても売れたのよ。ビデオにもなってお金が入ってきた。だからね、お母さんが一年、二年仕事をしなくても、どうということはないのよ」

本当にそうだったら、どんなにいいだろうかと瑞枝は思った。

「日花里、ご飯を食べに行こうか」

瑞枝はリモコンのスイッチを切った。三十二インチのテレビの画面では、若い女が泣きながら男に愛を訴えているところであつた。あざとい場面ばかりで構成しているこのドラマは、現在視聴率のトップを独走している。酒を何度か一緒に飲んだことがある若い女性脚本家が書いたものだ。

やはり今の瑞枝には、他の人間が書いたドラマを見るのは耐えられそうもない。

「いつものファミレスじゃないよ。今日はお母さん、おごっちゃう」

「えっ、どこいくの」

「カジキ亭のハンバーグにシーフードサラダ。ポテトサラダだっていいよ」

「やったーっ」

日花里はガッツポーズをとる。瑞枝は料理をつくるのが何よりも苦手だ。

日花里がもつと幼い時は、料理もしてくれるベビーシッターに来てもらっていた。自分でつくるぐらいなら今でも近くのファミリーストランへ出かける方を選ぶ。瑞枝の懐具合と気嫌がよければ、駅前のお店街の中にある洋食屋へ行くこともあつた。

今日はそちらの方にするというので、日花里は素早くコートを羽織る。昨年買った紺色のダッフルは、大きめのものを選んだのであるが、袖からセーターの手首がにゅつと出ている。やはり新調しなくてはならないだろう。

脚本家というのも芸能人と同じ水商売だ。仕事が順調で視聴率もぐんぐん上がっていく、取材費という名目で約束の脚本料にさらに上乘せしてもらう、ノベライズが売れて印税が入ってくる、などという時は、

当然気が大きくなってくる。娘のコートなど百枚買ってもいいと思えるほどだ。

けれども今の自分は、確かにツキに見離されているのかもしれないと瑞枝は思った。娘のコートの小さにしんみりとするようでは、これはかなり気持ちがいっている証拠ではないか。瑞枝は「さあ、行くよ」と大きな声で呼びかけた。

「あのさ、お母さん、今夜はビール飲んでもいいかな」

「ダメっていったって飲むくせに」

「お、言うね。そこまで読まれてるならビールじゃなくてワインにしようかな」

「お母さん、ノリやすいよね。ワインだなんて。すっごいミスター」

娘の憎まれ口に何か応えようとした時電話が鳴った。居間の電話ではなかった。

電話の呼び出し音は、ソファの傍に置いた瑞枝の大ぶりのバッグから聞こえてくる。さっきその中から財布とハンカチを取り出し、普段使いの布のバッグに移し替えた。手帳や携帯電話といった嵩高かさだかいものは元のバッグの中に入っている。それが鳴っているのだ。

瑞枝が携帯電話を持ったのは昨年のことだ。連続ドラマの仕事が入った時、どうしてもプロデューサーから持たされた。今は専ら日花里との連絡用に使っている。日花里がここにいるということは、電話は違う人間からかかっているということだ。が、自宅の電話番号を知っている者はいても、携帯電話の番号を知っている者はそう多くはない。若い人と違って、そうめったに番号を教えたりはしなかった。

「もし、もし、沢野さんですか」

耳に飛び込んできた女の声には記憶があった。マスコミ業界に働く女特有の、早口でやや狎なれ狎なれしい口調だ。